

## 【クレア経済アドバイザーの視点】

クレアでは自治体の海外経済活動に対し、より効果的な支援を行うため、経済交流課に経済アドバイザー（商社 OB）を設置しています。

海外経済活動に必要な基本情報から、輸出入や海外でイベント、商談を行う際の注意点などの個別具体的なアドバイスまで、専門的見地からの助言を行っています。どうぞご活用ください。

毎月、小笠原経済アドバイザーの視点による注目情報をお届けします。



## 貿易における「ハラール」の重要性(その2)

交流支援部経済交流課

(前号より続く)

### 4. ムスリムの5つの義務の詳細

・**信仰告白(シャハーダ)**：「アッラーのほかには神はなし。マホメッドは神の使徒なり」とアラビア語で唱えること。日々の礼拝には毎回この言葉を唱える。また生まれた子供の耳元で唱えたり、礼拝の呼びかけ（アザーン）で用いたりする。

・**礼拝(サラート)**：全てのムスリムは1日5回、アラビア語で礼拝を行うことが義務づけられている。イスラム地域では、礼拝の時刻が近づくと、モスク塔の上から礼拝を呼びかける「アザーン」が聞こえてくる。礼拝を行う場所は墓場など不浄な場所でなければどこでも良いが、できる限りモスクで行うよう奨励されている。礼拝は1人でも集団でも行うことができるが、毎週金曜日の正午に行われる集団礼拝は導師のもとモスクで行うのが原則である。

・**喜捨(ザカート)**：貧しい者や寡婦、孤児、新たに改宗した者など、困窮者の救済を目的とした義務的な施しのことである。1年間所有した金銭や家畜、収穫物の財産から一定の割合（金銭なら2.5%）で徴収される。ただし、最低基準以下の財産しか有していない人にはこの義務は発生しない。現代ではサウジアラビアなどの一部の国を除いて、政府がこのザカートを徴収することは少なくなってきている。しかしながらこの寄付の文化はイスラム世界では色濃く残っており、財による施しだけでなく、慈善行為一般も奨励されている。



・**断食(サウム)**：イスラム暦の第9月は断食月（ラマダーン）と言われ、日の出から日没まで断食（サウム）をしなければならない。禁止されるのは飲食だけではなく喫煙等も含まれる。ただし、子供や、病人、妊婦や授乳中の女性、旅人、戦場にいる兵士などは除外される。これらの義務は皆が苦しい義務を負うことで困窮者のつらさを知り、連帯感を高めることにつながるとされている。ただ、断食の義務は日没までで、その後は普段よりも豪華な食事を楽しむ。また、断食月が終わると、二大祭礼の一つ、「食明けの祭り」となり、モスクで集団礼拝などが行われる。イスラム教では全体を統括する協会

組織のようなものは存在しないので、義務の履行については基本的には個人の判断にゆだねられている。

・巡礼 (ハッジ) : モハメッドは死去の 3 か月前にメッカのカアバ聖殿への巡礼を行った。その時にモハメッドが取った手順と作法に沿って行うのが 5 つの義務の最後の一つ巡礼 (ハッジ) である。ハッジはイスラム暦 12 月 8 日からメッカで行う義務であり、カアバ聖殿をはじめとした数か所の聖所を決められた手順と作法で巡らなければいけない。服装も「イフラム」と呼ばれる簡素な白い布製のものを着用する必要がある。これは神の前では貧富や人種の差別はなく信者はみな平等であるということを示している。



この巡礼は他の 4 つの義務とは違い、一生の内に一度は行くべきものという位置づけであり、たとえ履行できないからといって非難の対象にはならない。むしろ巡礼 (ハッジ) を行うことはムスリムの誇りであり、その経験がある人は男性であれば「ハーッジュ」、女性であれば「ハーッジャ」と敬称をつけて呼ばれる。交通手段の良くなった現代では、毎年ハッジの時期には 250 万人以上の巡礼者がメッカに集まる。以上がイスラム教とムスリムの概要である。おそらく本当はもっと多くの決まりや慣習、教義があるが、ここではそれらを全て明らかにしない。「ハラール食品」について理解を得るために最低限必要なイスラム教とムスリムの背景を述べるにとどめる。

## 5. メイド・イン・ジャパンブランドが見当たらない市場

今やイスラム圏の人口は約 20 億人であり、市場規模約 5,800 億ドルと言われるハラール市場が存在する。そしてその市場規模は毎年拡大している。世界人口の 20% を占める巨大なハラール市場の一部は身近な東南アジアにも存在する。それはイスラム国のマレーシアやインドネシアである。もちろん非イスラム国にもムスリムは存在する。仏教国タイ国にもムスリムは約 800 万人、中国にも約 4,000 万人いると言われている。インドネシアの人口 2 億 7,000 万人のほとんどがイスラム教徒であり、マレーシアは 1,600 万人、日本にも約 10 万人のイスラム教徒がいる。アジアだけでも約 12 億人のイスラム教徒がいると言われているのだ。

しかし、この巨大食品市場にはまだメイド・イン・ジャパンの「ハラール食品」がほとんど見られないのである。日本の目の前に、しかも日本に憧れ、日本の「食の安心・安全」に全面的に信頼を置いている東南アジア諸国の「ムスリム市場」という巨大な「ブルーオーシャン」が広がっている。もちろん彼らの一部高所得者層の人々は、現地の日本食レストランで鉄板焼きを食べ、すき焼き、しゃぶしゃぶを楽しんでいる。しかしながら大半の人々はなかなか日本レストランには入れない。年に数回の特別なお祝いの日にしか行けないのである。もしこの憧れのメイド・イン・ジャパンの日本食品が、現地日本レストランでなく一般の市場からごく普通の食糧品店や、外食店で、しかも手頃な価格で手に入れば、これほどの楽しみはあるまい。ただ、彼らは食品についても戒律の厳しい「アッラー」との約束がある。それが「ハラール食品」である。今回はこの「ハラール食品」の具体例に触れてみたい。